



## 喜多埜

## 桜の花見

今や春の風物詩のようになっています桜の

花見ですが、この花見を史上初めて行ったのは当神社、御本社の主祭神でもありません嵯峨天皇さまという事はあまり知られていません。

『日本後紀』によると弘仁三年(西暦八一二年)に、京都の神泉苑にて観桜の宴を催された記録があり、文献上確認できる最古の花見の記録とされています。この説には補足があり、『凌云集』に収める嵯峨天皇さまの詩に「神泉苑花宴賦二落花一篇」とあり、花見が行われた事は間違いないようです。

この神泉苑での花見以前にも『万葉集』などで四十首ほどの桜の歌が詠まれています。現代に続くような宴会を催されたのは、おそらく嵯峨天皇さまがはじめてのようで、以後、平安時代では桜の歌が多く詠まれるようになります。『古今和歌集』では七十首ほどにまで増えています。極めつけは、嵯峨天皇の皇子であり、第五十四代天皇の仁明天皇の御代に、紫宸殿の南庭に植えられていた梅の木に替えて、桜が植えられるようになり、以後、雛人形でも飾られるような「左近の桜、右近の橘」となった事からみても、嵯峨天皇の御代に桜が日本を代表する花となった事が分かります。

しかし、大事なのは、何ゆえ嵯峨天皇が桜を愛されたかという点です。この初の花見を行われた二年前、後に「菓子の変」と呼ばれる政治抗争があり国家分裂の危機にまでなりました。桜の花に平安を願うお気持ち託されていたのかもしれない。

## 茶屋町の「菜の花」甦る

「菜の花や 月は東に 日は西に」

の俳句でも有名な江戸時代の俳人、与謝蕪村が愛した菜の花畑は、現在の茶屋町あたりにあったといわれています。元々は菜種油を採る為に植えられていましたが、明治以後、石油への転換で次第に姿は消えてゆき、現在は雑草すら見かけない街となりました。

そんな砂漠の都会の茶屋町に鎮座します、御旅社社務所の屋上で現在、試験的に日本の在来種の菜の花を植え、先月下旬より黄色い花を咲かせております。およそ百年ぶりに茶屋町に菜の花が甦りました。黄色い花びらに古の茶屋町を垣間見る思いです。

(申し訳ありませんが、一般の方の見学は社務の都合上お断りしております)

## 四月の旬

神さまにお供えする食べ物等の事を神饌(しんせん)といい、神事の際に米・酒・塩・水などの基本のお供え物を神前に並べ奉ります。本来、順番や置き方など色々決まり事がありますが、古来より「旬のもの」をお供えする事が、何より神さまが一番お喜びになられる事と考えられ、米・酒などの基本のお供えと共にお供えされてきました。

この四月に旬を迎えるものとして、野菜では筍、そら豆、コゴミなどの山菜類、果物ではイチゴ、いよかん、魚介類では鯛(桜鯛)、サヨリ、ハマグリ、また、食べ物以外では、桜、百合、菜の花など季節の花をお供えするところもあります。春の苦味と瑞々しさを神さまと共に分かち合い、春の元気を頂きましょう。

## 神社携帯サイトのQRコード

ドコモ、ソフトバンク、  
au、モバイルPC 対応



編著 網敷天神社 禰宜(神主)

白江 秀知

